

## 大分県安心院町宮ノ原遺跡の遺物

坂 本 嘉 弘

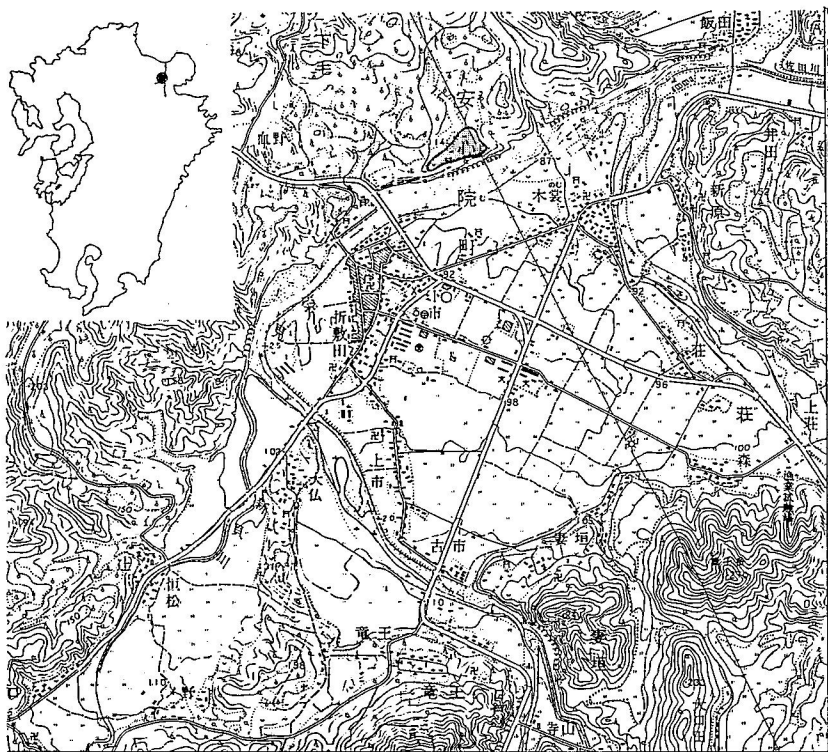
宮ノ原遺跡のある安心院町は、由布・鶴見山に源を発し、周防灘に向けて北流する駅館川の中流域に開けた小盆地を中心とする町である。遺跡はこの安心院盆地の北に位置する標高約一三〇呎で東西約四〇〇呎、南北約八〇呎の細長い台地上に立地している。台地の南側は駅館川の支流である深見川に続く急斜面で比高差は約四〇呎である。また台地の北側には谷頭に池のある幅約三〇呎の浅い谷がめぐり、深見川へつづいている。

現在、この台地は「家族旅行村『安心院』」の体育施設が建設されており、この工事に先立ち昭和五十五・五十八年にかけて発掘調査が実施された。その結果、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての貯蔵穴、竪穴住居跡、溝状遺構、石棺群、甕棺群が検出され、古代の集落跡であることが判<sup>△註1V</sup>った。

ここで紹介する資料は、この調査以前に地元の河野清氏により採集されていたものと、報告書作成時に報告できなかったものである。

一一

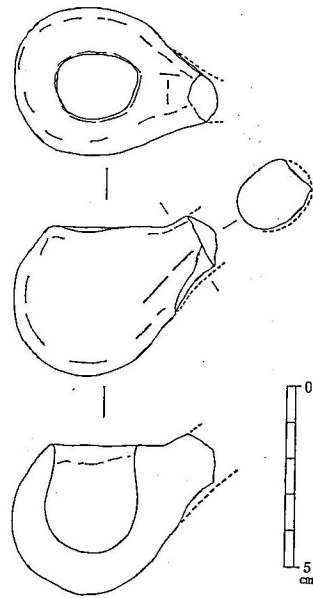
杓子形土製品(第2図)出土位置はC-3調査の溝遺構である。溝の形状は、ほぼ東西方向に延びる短かいもので、断面形は



第1図 宮ノ原遺跡位置図 (アミカケ部) 盆地内には条里遺構が残る

逆合形、深さは約五〇センチである。溝からは大量の壺形土器、甕形土器、高坏の破片が出土し、杓子形土製品もそれに混在した状態であった。身の部分は完形品であるが、柄部を欠いている。残された身の部分の外面の大きさは最大幅四センチ、高さ一・四センチで内面の口径一・二センチ、最大幅五・二センチ、深さ三センチ、最大厚さ一センチである。内外面ともに撫で仕上げであるが外面は磨滅している。胎土には細砂粒、斜長石、角閃石などが含まれ、一緒に出土した土器と同じである。色調は明灰白色で、焼成も良い。時期は共伴する土器などから、弥生中期前半に属する。

杓子形土製品に関してはすでに小林康男<sup>註2</sup>・渡辺誠<sup>註3</sup>により総合的な研究がなされている。それによると、この種の遺物は縄文時代前期から出現し、以後弥生・古墳時代と各時代にみられ、その分布も北海道から沖縄まで全国にわたる。形態も数種類があり、小林は七種類に分類し、渡辺は六種類に大別した上で、さらに十種類に小分類し、縄文系列、弥生系列、ヒョータン系列、沖縄系列にまとめて論じてい



第2図 宮ノ原遺跡出土杓子形製品実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

る。

その用途については両者とも「杓形土製品の形態・サイズ等は本来のそれを模倣したものであり」（渡辺）「呪術的・祭祀的な何らかの儀式に用いられた可能性の強い器具であったと考えられよう。」（小林）という意見で実用品としての可能性の薄いことを指摘している。

宮ノ原遺跡の本資料は、渡辺の分類によるとⅢb類に属し、ヒョータン系列の典型的な例である。渡辺による

とこれは、ヒョータンの「…頭部にあまり大きくない孔をあけ、断面が球形を保っていることに大きな特色があり…液体をすくいとする杓子であり、…その液体は何かとなると…大場磐雄氏によって指摘されているように酒であろう。…すなわち濁酒中の粒状物を少しでも避けて、液体部分を多くすくいとるのに便利のように考えられた形態とみなされる」と論じられており、その展開も西日本の弥生前期に出現し、時代が下るにつれ東漸するという、水稲栽培の伝播と同じコースをたどることを指摘している。九州のヒョータン系列の杓子形土製品の出土例は、弥生前期の鹿児島県一例、弥生後期は宮崎県二例、福岡一例が知られている。こうした中で弥生中期前半に属する本資料は、空白であった中期を埋めるものとして注目される。

### 三

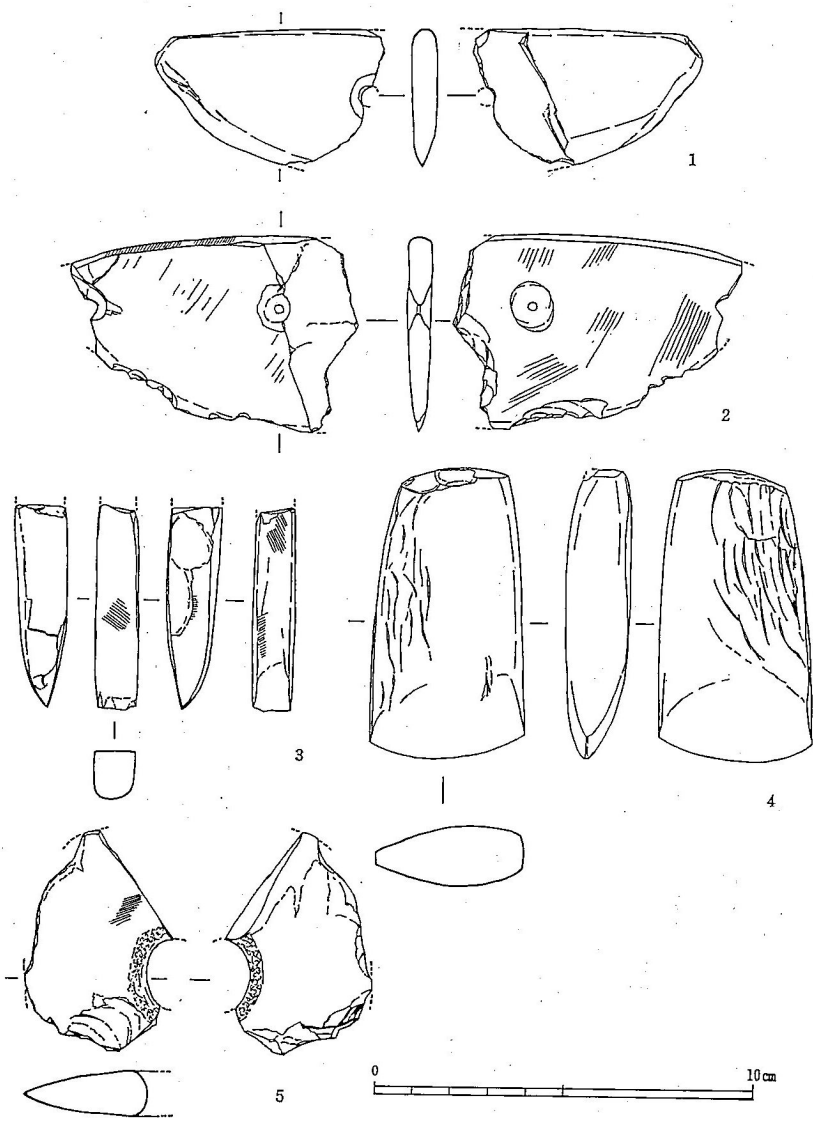
石器は4種類、8点を紹介する。いずれも表採品で、所属する時期の明らかなものはない。第3図1・2は石包丁である。1は穿孔部から割れているが、残された部分からみると細長い形態となる可能性が強い。断面は厚さ七・五ミリではほぼ平行し、刃部で急にとがる。石質は赤っぽい凝灰岩で、立岩産の可能性が強い。2は中ほどで割れたものであり、径二・五ミリの穿孔部

が残されている。残された部分からみると半月形に近い形態になると思われる。断面は穿孔部附近が六・五筭で最大厚となり、刃部に向って細くなっている。石質は灰色をした凝灰石である。

3・4は石斧である。3は頭部を欠く柱状片刃石斧である。残存部は長さ五・四筭で、刃部は刃こぼれしている。断面は一・一筭×一・三筭の長方形で、長軸方向の一方は丸味をおびており、刃部はその面が湾曲し、幅一筭の片刃状刃部に仕上げられている。石質は風化のためか灰白色をしているが頁岩と思われる。4は完形品の小型の石斧である。全長六・七筭、頭部幅二・九筭、刃部幅が最大で四・〇筭、厚さ一・七筭である。両面に荒割り段階の剝離面が残るものの、側面は研磨によって仕上げられている。刃部断面は弱凸強凹片刃である。<sup>註4</sup> 端部は使用のためか敲打のためか片減り状になっている。石質は緑色片岩である。

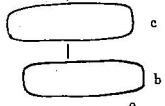
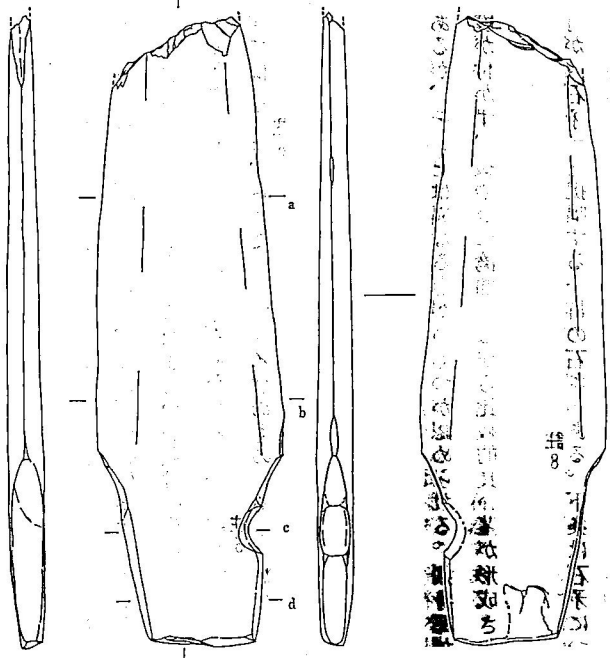
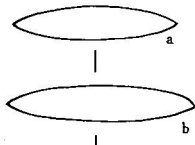
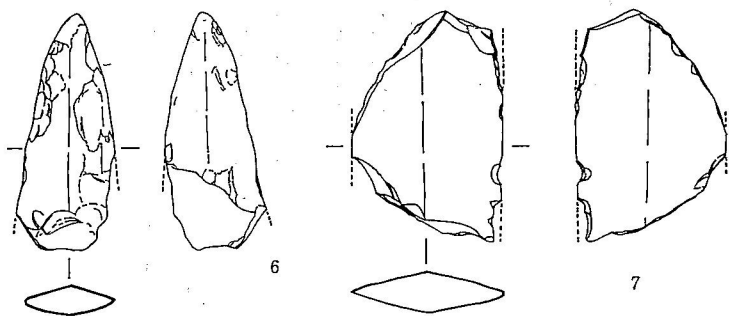
5は環状石斧の破片である。残された部分から複元すると、穿孔の径は二・四筭、全体径は四・五筭で、最大厚は一・二筭である。断面は底辺の丸い砲弾形を呈しており、周辺部は尖っている。表面は研磨されているが、穿孔には敲打痕が残っている。結晶片岩質である。

第4図は全て石剣の破片である。6は鋭角的に尖る切先の資料であるが、全体の磨滅が著しく、特に縁辺は欠けている。しかし、中央部には鑄が残されており、断面形は扁平な菱形を呈する。石質は淡茶色の凝灰岩質である。7は石剣の刃部の一部分である。縁辺を少し欠いているが、表面に痕は少なく、良く研磨されている。両面とも中央に鑄が残されており、このため断面形は幅三・七筭厚さ一筭の扁平な菱形を呈している。石質は緑色片岩である。8は石剣片である。切先部を欠くが、それ以外の損傷は少なく全体の形態を知ることができる。全長は不明であるが、残された長さは一五・五筭、最大幅四・六筭、茎端部幅二・七筭である。形態は茎部が特徴的で、左右非対象形であり、しかも一方に幅一・二筭・深さ〇・四筭の抉りが加えられている。茎部の断面は両端が面取りされており、厚さ〇・九筭の隅丸長方形を呈している。刃部は両端とも研ぎ出されており、闊の部分で最も幅広で切先に向って細長く二等辺三角形状になっている。断面は、柄部よりやや薄く、厚さ〇・八筭の長紡垂形を呈する。全面良く研磨されている。石質は緑色片岩である。



第3図

宮ノ原遺跡出土石器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）



五  
一

第4圖

宮ノ原遺跡出土石剣実測圖(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

以上が表面採集による石器である。石包丁は弥生時代の各時期にみられる石器であるが、宮ノ原遺跡の調査で、出土した時期のわかる石包丁は弥生後期のものが多い。その形態は幅が狭く、断面形は刃部近くで急に角度が付く。第3図1は、この例から考えると、弥生後期の可能性が強い。これに対し2は幅が広く、断面形は中ふくらみになり、1に比較すると古いと思われる。3・4の石斧のうち3の柱状片刃石斧は大陸系の磨製石器であるが4の石斧は縄文時代の伝統を受け継いだ形態をしている。調査の際も石斧が10点出土しているが、大陸系の磨製石斧5点、縄文系の石斧5点である。時期は弥生前期末から後期までであり限定できない。5の環状石斧は縄文早期から見られる石器であるが、この例は弥生時代に属するものであろう。

石剣は調査時に4点出土しており、今回の3点と合せて7例目になる。これまでの石剣は弥生前期末の幅広の茎をもつ鉄剣形石剣と有柄式石剣が退化したと思われる断面形が刃部菱形、柄部楕円形の石剣がある。今回紹介する第4図8の形態の石剣は近年数例が報告されているが、これまでの研究ではあまり知られていないタイプのものである。<sup>註5</sup> 数少ない例としてあげられる福岡県行橋市下裨田遺跡のものは貯蔵穴からの出土であり、宮ノ原遺跡例と同じく基部の資料である。剣身部よりやや細くなった基部の一侧縁に挟りを入れている。また最近では大分市米竹遺跡からも出土している。<sup>註7</sup> これも貯蔵穴からの出土で先端部を欠く資料であるが、宮ノ原遺跡例・下裨田遺跡例と同様である。

このタイプの石剣は、いわゆる鉄剣形石剣であるが、それとは異なる点がいくつか認められる。剣身部が幅広で、断面は長紡垂形となる。茎部も幅広で、剣身部との境は段が付かず、緩やかに湾曲しながら比較的長い茎が形成される。茎の一侧縁のみに一ヶ所挟りが加わる。

この茎部に挟りのある石剣としては、下条信行が「石矛」と提唱する一群の石剣がある。<sup>註8</sup> 下条は石矛について四つの条件を掲げている。そのうち「…全長中位より下方で最大幅となる…」「…刃部は身厚の断面紡垂形に仕上げられる…」「…刃部と基部の転換点には通常一側に、時に二側に挟りが入れられている。」など挟り以外でもこの石剣と共通する項目が多い。しかし、その一方で闊部を形成し茎をつくり出すことや、刃部が鋭いことなど石矛とは基本的に異なり、鉄剣形石剣との中間形態

とも言える。次に、このタイプの石剣の時期であるが、下稗田遺跡では弥生前期末と考えられており、米竹遺跡も弥生前期末から中期にかけての遺跡である。そして宮ノ原遺跡も、弥生前期末から中期にかけての遺構・遺物が多量に検出されている。このことから、この石剣の時期は弥生時代の武器形石製品にとって画期となつてゐる弥生前期末から中期初頭にかけて出現するものと考えられる。<sup>註9</sup> さらに分布をみると、現在知られているのは先に述べた3例のみであるが、いずれも東九州の豊前から豊後にかけての地域に広がつてゐる。

以上、数例の少ない武器形石製品であるが今後ともその出土状況や類例など注目をしたい石器である。

最後に、杓子形土製品的重要性を指摘していただいた名古屋大学考古学研究室の渡辺誠助教授、資料を提供していただいた採集者の河野清氏、安心院町教育委員会の尾立卓美氏に、末尾でありますが感謝申し上げます。

註 1 坂本嘉弘、佐藤良二郎「安心院・宮ノ原遺跡」安心院町教育委員会 昭和59年

2 小林康男「縄文・弥生の匙形土製品」信濃第33巻第7号 昭和56年

3 渡辺誠「杓子形土製品の研究」(日高見国―菊池啓治郎学兄還暦記念論集) 昭和60年

この遺物に関しては小林は匙形土製品、渡辺は杓形土製品と異なる名称で呼んでいるが、ここでは「実用品であることの明らか木製品やヒョータン製の杓子の形態・サイズ等を考察の前提とする」という考えを支持しその名称を用いる。

4 佐原真「石斧論―横斧から縦斧へ―」(考古論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―昭和52年)の分類による。

5 有光教一「朝鮮磨製石剣の研究」(京都大学文学部考古学叢書第二冊・昭和34年)の中に福岡県嘉穂郡鎮西村大日寺出土のものとして一例類似する資料が紹介されている。

6 長嶺正秀・末永弥義編「下稗田遺跡」行橋市教育委員会 昭和60年

7 大分市教育委員会により昭和62年度調査、讃岐和夫氏、塔鼻光司氏から教示を受ける。

8 下条信行「石矛の提唱―木葉形磨製石製武器について―」(賀川光夫先生還暦記念論集) 昭和57年

9 弥生前期末から中期初頭にかけては、石矛の出現、有柄石剣の消滅、鉄剣形石剣の形態にバラエティが生じてくるなどの現象がみられる。  
(大分県教育庁・大分郡挾間町大字鬼崎二二三一)